

令和2年度(2020年度) 道徳科授業づくりプロジェクト研究

児童生徒が自ら成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとする 小・中学校道徳科の授業づくり

ー学習状況や道徳性に係る成長の様子の評価とフィードバックの充実ー

内容の要約

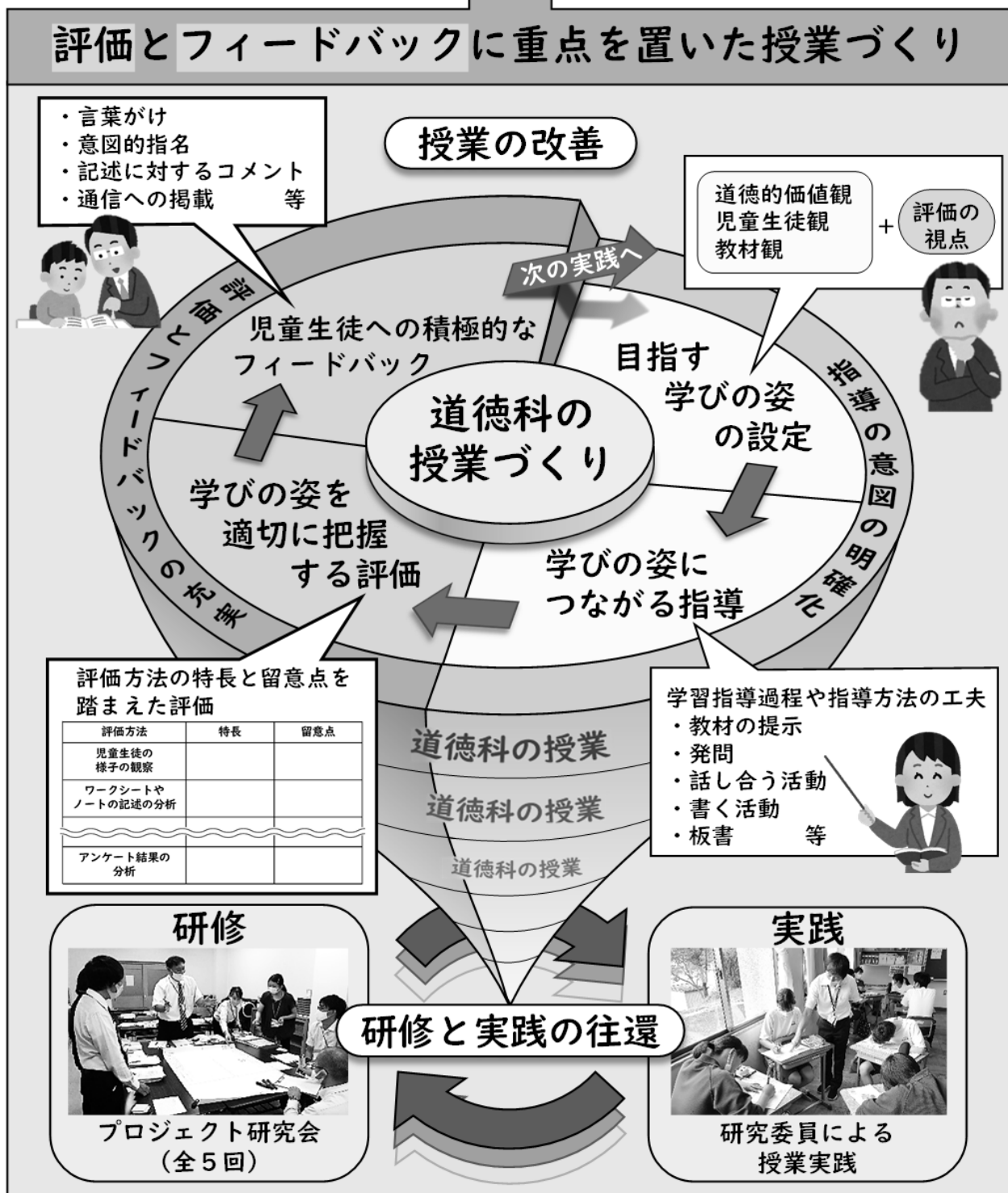
小・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編では、道徳科の評価は、指導のねらいとの関わりにおいて、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童生徒の成長を促すことが大切であるとされている。本研究では、指導者が、指導の意図を明確にもち、児童生徒の目指す学びの姿を設定して、評価の視点を踏まえた授業づくりに取り組んだ。その結果、指導者が、授業における児童生徒一人ひとりの学びの姿を適切に把握して評価し、積極的なフィードバックを行ったことにより、児童生徒が自己の成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとする姿が表れた。

キーワード

学習状況や道徳性に係る成長の様子 指導の意図の明確化 評価の視点
目指す学びの姿の設定 学びの姿の適切な把握 積極的なフィードバック

目		次	
I	主題設定の理由	(1)	VI 研究の内容とその成果 (5)
II	研究の目標	(1)	1 研修と実践の往還 (5)
III	研究の仮説	(2)	2 評価とフィードバックに重点を置いた授業実践 (6)
IV	研究についての基本的な考え方	(2)	3 児童生徒と研究委員の変容 (12)
1	本研究で目指す道徳科の授業づくりとは	(2)	VII 研究のまとめと今後の課題 (14)
2	評価とフィードバックに重点を置いた授業構想	(2)	1 研究のまとめ (14)
3	目指す授業の具現化に向けて	(4)	2 今後の課題 (14)
V	研究の進め方	(5)	文 献
1	研究の方法	(5)	
2	研究の経過	(5)	

児童生徒が自ら成長を実感し、
さらに意欲的に取り組もうとする姿



<道徳科の評価>

授業における指導のねらいとの関わりにおいて、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童生徒の成長を促す

道徳科授業づくりプロジェクト研究

児童生徒が自ら成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとする 小・中学校道徳科の授業づくり

ー学習状況や道徳性に係る成長の様子の評価とフィードバックの充実ー

I 主 題 設 定 の 理 由

小・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編(以下、解説道徳編という。)では、学校における道徳教育の目標は、「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」^{1) 2)}とされており、道徳科の目標も同様に、道徳性を養うことである。また、道徳教育における評価については、指導者が児童生徒一人ひとりの人間的な成長を見守り、児童生徒自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付ける働きをもつようにすることの必要性が示されている。さらに、道徳科の評価にあたっては、それぞれの授業における指導のねらいとの関わりにおいて、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童生徒の成長を促すことが大切であるとされている。

このことは、指導者が明確な指導のねらいと評価の視点を持ち、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を適切に把握し評価することと、児童生徒の成長を促すフィードバックを行うことの重要性について認識し、授業を改善することの必要性を示したものであるといえる。

また、文部科学省が作成した「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」(令和元年6月)には、道徳科の評価について、「授業において児童生徒に考えさせることを明確にして、『道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める』¹⁾という学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ります」³⁾と示されている。

当センターでは、平成29年度の道徳科プロジェクト研究において、主体的に考え、他者と本音で語り合う「考え、議論する」道徳の実現を目指した授業づくりの研究に取り組んだところ、道徳性を養うための学習活動を適切に設定しつつ、どのようにその学習状況や道徳性に係る成長の様子を評価するか、という課題が挙がっている。さらに、道徳科の全面実施により、評価についての指導者の関心が高まっている。

そこで本研究では、指導者が児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を適切に把握し評価したことを基に、児童生徒の努力を認めたり励ましたりするフィードバックを行うことにより、児童生徒が自らの成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとする道徳科の授業づくりを目指すことが必要と考え、本主題を設定した。

II 研 究 の 目 標

道徳科の授業づくりについて研修と実践を往還し、指導者が児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を適切に把握し、評価することとフィードバックを充実させることにより、児童生徒が自らの成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとする道徳科の授業づくりを目指す。

¹⁾ 引用文中の「物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める」は小学校学習指導要領における目標の文言、「物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める」は同じく中学校の目標の文言である。

Ⅲ 研究の仮説

道徳科の授業づくりについて研修と実践を往還させ、指導者が指導のねらいに応じて、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を適切に把握し評価したことを、児童生徒にフィードバックする授業を行う。そのことにより、個々の児童生徒の成長が促され、児童生徒が自らの成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとする姿につながるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 本研究で目指す道徳科の授業づくりとは

小・中学校学習指導要領(平成29年告示)において、道徳科の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」^{4) 5) i)}と示されている。指導者は、目標に明記された学習の中で、評価の視点をもって一人ひとりの児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を適切に把握するために、学習活動に着目した評価を行う。

道徳科の評価について、小学校解説道徳編では、「他者との比較ではなく児童一人一人のもつよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、年間や学期にわたって児童がどれだけ成長したかという視点を大切にすることが重要である」¹⁾とされており、中学校解説道徳編においても同様のことが示されている。そのため、道徳科の授業における評価は、児童生徒一人ひとりの学習活動に着目し、道徳的諸価値に関して、何をどのように考え、どのように成長したのかを適切に把握して行うことが求められる。

そこで、本研究では、児童生徒がいかに成長したかを認め、励ますという点を重視し、学習活動に着目した評価とフィードバックを行う授業づくりを目指す。学期や学年末の通知表等による評価とフィードバックだけでは、児童生徒の学習改善につながるものとしては不十分と考え、毎時間の授業における評価とフィードバックのあり方を見いだす。また、道徳科の評価は個人内評価で行うという趣旨を踏まえ、研究の始期と終期の変容を捉える際は、学級全体の様子としてだけでなく、特に注目する児童生徒を決めて、その姿の変容を追っていく。

2 評価とフィードバックに重点を置いた授業構想

本研究で大事にしたいことは、評価とフィードバックに重点を置いて授業を構想することである。その際には、指導の意図を明確にもって授業を構想することが重要である。まず、道徳科の年間指導計画で主題名と内容項目、教材の特徴を確認する。指導者は内容項目に含まれる道徳的価値の意義を解説道徳編を基に理解し、道徳的価値に関する児童生徒のよさや課題等の実態を把握したうえで教材の効果的な活用の仕方を計画する。そのうえで、本時の授業で児童生徒が何をどのように考え、どのようなことに気付くことが望ましいのかを検討することにより、指導の意図が明確になる。

(1) 目指す学びの姿の設定

指導者は、授業を構想するにあたり、学習のねらいとする道徳的価値を含む内容項目を基に、本時で目指す児童生徒の学びの姿を設定する。解説道徳編では、道徳科において、児童生徒の学習状

i) 引用文中の「物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める」は小学校学習指導要領における目標の文言、「物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める」は同じく中学校の目標の文言である。

況や道徳性に係る成長の様子を見取ることについて、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」^{1) 2)} という二つの大きな評価の視点が示されている。道徳的価値観、児童生徒観および教材観に加え、この二つの評価の視点を踏まえて、児童生徒が道徳的価値の理解を深めている姿を目指す児童生徒の学びの姿として捉え、具体的なイメージを指導者がもつ。そのことにより、ねらいに迫る授業の展開が明らかとなり、学びの姿につながる指導を具体的に検討することができる。

(2) 学びの姿につながる指導

指導者は、目指す児童生徒の学びの姿につながるように、教材を十分に分析し、授業の展開を考える。そのためには、例えば、児童生徒が問題意識をもつことができる教材の提示の工夫、ねらいとする道徳的価値について深く考えられる発問の工夫、児童生徒相互の考えを広げ深められる話し合う活動の工夫、自分の考えを整理できる書く活動の工夫、複数の考えの相違点や関係性を示して思考を深める板書の工夫等が必要となる。

とりわけ道徳科の授業は、多様な学習の展開が可能であるため、指導者が目指す児童生徒の学びの姿に応じた学習活動を選択し、実践することが学習の効果を高めると考える。

児童生徒の学習状況と道徳性に係る成長の様子を適切に把握することについて、解説道徳編では、学校や児童生徒の実態に応じて、「教師の明確な意図の下、学習指導過程や指導方法の工夫と併せて適切に考える必要がある」^{1) 2)} と示されている。図1のとおり、二つの評価の視点はさらに七つの視点に分類され、例示されている。本研究では、多様な学習の展開から、本時で目指す児童生徒の学びの姿の実現に必要な学習指導過程と指導方法を決定しやすくするために、指導者が七つの評価の視点を踏まえて授業を構想することとする。

視点1 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか ①道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしているか ②自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしているか ③複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしているか
視点2 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか ④読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしているか ⑤現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直しているか ⑥道徳的な問題に対して、自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めているか ⑦道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしているか

解説道徳編を基に作成

図1 本研究における七つの評価の視点

(3) 学びの姿を適切に把握する評価

指導者は、目指す児童生徒の学びの姿につながる学習活動において、児童生徒一人ひとりの実態に応じた評価を行う。

評価は、授業におけるワークシートやノートの記述、児童生徒の様子等の分析と観察によって行うことができるが、評価を行う際には留意すべきことがある(表1)。例えば、ワークシートやノートの記述から学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握することは、全員の学習の記録が集められるという特長がある。しかし、留意点として、記述による表現が不得手な児童生徒の評価には適さないこと、

表1 道徳科の授業における評価方法の例

評価方法	特長	留意点
児童生徒の様子の観察 (表情、態度、発言等)	・特定の児童生徒の評価が可能である ・その場ですぐに評価することが可能である	・座席表や名簿、ノートに即座に記録しなければならない ・短時間で評価を行う必要があり、評価できる人数が少ない
ワークシートやノートの記述の分析	・1単位時間で全員の記録が集められる ・考えの深まりや変容を見取ることが可能である	・記述による表現が不得手な児童生徒の評価が難しい ・記述する時間を要する
児童生徒の考えが表された板書の分析	・考えを可視化し、全員で考えを共有することが可能である	・評価や板書の整理等、同時に行うことが多い ・発言しなかった児童生徒の考えの詳細は記録されにくい
児童生徒への聞き取り・インタビューの分析	・個に応じて把握することが可能である	・評価できる人数が少ない ・授業外の時間を要する
アンケート結果の分析	・事前の道徳的価値観を把握でき、終末に比較することが可能である	・事前に記入する時間を要する

記述する時間の十分な確保が必要になることが挙げられる。そこで、表情やしぐさ、態度、発言等から児童生徒のよさを捉えた時点で、即座に座席表へ記入して評価することを加えることにより、一つの評価方法では評価しきれなかった児童生徒の学びの姿を適切に把握することができる。このように、本研究では、評価方法のそれぞれの特長と留意点を踏まえ、学びの姿を適切に把握する。

(4) 児童生徒への積極的なフィードバック

指導者は、目指す児童生徒の学びの姿に照らし合わせて、学習状況や道徳性に係る成長の様子を適切に把握し評価したことを基に、児童生徒の努力を認めたり励ましたりするフィードバックを行う。

指導者によるフィードバックは、児童生徒が道徳科の学習における自身のよさを自覚し、そのよさを一層伸ばしていこうとする思いを高める契機とする。

評価の視点に沿って児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握し評価したことをフィードバックする方法としては、毎時間の授業での言葉かけや意図的指名、ワークシートおよびノートの記述に対するコメントの記入、学年・学級通信への掲載等が考えられる(表2)。

児童生徒の成長を促すために、指導者が評価の時機や方法を工夫しつつ、一人ひとりの考えを受容し、積極的に認める言葉を用いてフィードバックする。そして、児童生徒が自己の学習状況を振り返り、学習を積み重ねたことにより成長を実感することで、さらに道徳科の学習に意欲的に取り組もうとする姿を目指す。

表2 評価とフィードバックの具体例

事例1	話し合う活動を通して、一面的な見方から多面的・多角的な見方に発展させたことを記述内容から見取り、個別に言葉かけを行う。
事例2	友達の考えに対する挙手やうなずき、色カードの提示等による意思表示から、自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている姿を見取り、個別に言葉かけを行う。
事例3	話し合う活動で、複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えている発言を捉え、意図的指名により学級全体への発表を促す。
事例4	道徳的価値の実現の難しさを自分のこととして捉え、これからの生き方について考えようとしていることを記述内容から見取り、励ましのコメントを記入する。
事例5	自らの道徳的価値観を振り返り、他者と議論する中で道徳的価値の理解を深めたことが記述内容に表れている箇所を捉え、下線を引く。さらに、学年・学級通信に記述内容を掲載する。

3 目指す授業の具現化に向けて

評価とフィードバックに重点を置いた授業を確実に実践するためには、指導の意図を明確にする手立てが必要だと考える。そこで、本研究では図2の様式の学習指導案を作成し、授業を実施する。

学習指導案作成にあたっては、先に、図2のAのように道徳的価値観・児童生徒観・教材観を主題設定の理由として記す。それを基に、本主題における児童生徒の学びの姿、その姿につながる指導、さらに、評価とフィードバックの工夫を具体的に記載する(図2のB)。そして、本時のねらいや学習指導過程等は、図2のBに記載したことで整合性がとれているかを常に確認しながら構想する。

本時のねらいには、道徳的価値の理解の深まりを意識し、具体的に本時の学習において目指す学びの姿や道徳性の様相を端的に表したものを明記する。

第〇学年 道徳科学習指導案		
日 時：〇年〇月〇日〇校時 学 級：〇年〇組教室〇名 授業者：氏名		
1 主題名「〇〇〇〇」【内容項目】		
2 教材名「〇〇〇〇」(出典：)		
3 主題設定の理由 (1) ねらいとする価値について(道徳的価値観) (2) 価値に関わる児童生徒の実態について(児童生徒観) (3) 教材について(教材観)		
4 児童生徒の成長を促すための評価 (1) 本主題における児童生徒の学びの姿 (2) 学びの姿につながる指導 (3) 児童生徒の学びの姿についての評価とフィードバック		
5 本時のねらい		
6 本時の学習指導過程		
学習活動・主な発問	予想される児童生徒の思い	教師の支援と評価
学習指導過程 1 導入 2 展開 3 終末		
7 板書計画		
8 その他(座席表、補助資料等)		

図2 道徳科の学習指導案の例

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 児童生徒が自ら成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとする授業づくりを行う意義と目標を研究委員と共有する。
- (2) 研修として、プロジェクト研究会を5回行う。講師を招聘し、先進的・先導的な研究や実践事例を基に授業構想と評価のあり方について学び、実践した授業を見直して、今後の授業づくりについて検討する。
- (3) 研究委員は、研修での学びと実践校における実践の往還を進める。
- (4) 研究会や授業参観を通しての意見交流や振り返り、児童生徒および指導者対象の質問紙調査等から、学習状況や道徳性に係る成長の様子を適切に把握し評価したことのフィードバックによる児童生徒と研究委員の変容を分析し、研究の成果と課題をまとめる。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究推進計画の立案	9月～11月	各校での授業実践、研究員が訪問(研究委員の授業参観、他の研究委員も参観可)
5月下旬	第1回研究会(プロジェクト研究の研究構想、内容の計画、これまでの授業の見直し)	10月6日	第4回研究会(研究委員の授業参観と研究協議)
6月上旬	児童生徒および指導者質問紙調査(第1回)の実施と分析	11月9日	第5回研究会(2学期の授業の交流、研究のまとめ)
6月～7月	各校での授業実践、研究員が訪問(研究委員の授業参観)	11月上旬	児童生徒および指導者質問紙調査(第2回)の実施と分析
7月7日	第2回研究会(実践交流、1学期後半に実践する授業の学習指導案作成)	11～12月	研究論文原稿執筆
9月1日	第3回研究会(1学期の授業の交流、2学期の授業構想)	1月	研究発表準備
		2月	研究発表大会
		3月	研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 研修と実践の往還

本研究の目標を達成するために、研究委員が研修と実践を往還させながら授業づくりについての学びを深めていくことができるよう、プロジェクト研究会を6ページの図3のとおり計画・実施した。

第2回研究会では、トータルアドバイザーおよび専門委員の講義から、道徳科において、指導者が児童生徒の目指す学びの姿を具体的にイメージして授業づくりを行うこと、評価の視点を評価のためだけでなく、授業づくりに生かすことを学んだ。研究協議では、1学期後半に実践する授業の検討を行うことを通して、評価の視点を基に、本時のねらいに応じた学習指導過程や指導方法、発問を構想することの重要性を再確認した。

第4回研究会では、研究委員による授業を参観後、実際の授業での児童生徒の学びの姿と、そこでの指導者による手立てを基に、学習活動における指導者の評価とフィードバックについて研究協議を行った。協議や指導助言から見いだした授業改善のヒントは、学習活動における児童生徒の反応を予想し、意図的指名や問い返しに生かすこと、発問に対する児童生徒の考えを認める言葉を使って積極的にフィードバックを行うこと、本時の終末において、学習を振り返る時間を十分に確保することである。

そして、各校での授業実践を経て、第5回研究会では、目指す児童生徒の学びの姿につながる評価とフィードバックの成果と課題についての研究協議や指導助言から、次のような授業づくりのポイントを見いだすことができた。そのポイントとは、本時の展開の部分では、七つの評価の視点を基に、児童生徒の学習状況を把握し、その場で言葉がけや意図的指名により即座にフィードバックを行うこ

とである。また、本時の終末の部分では、道徳性に係る成長の様子と道徳的価値の理解の深まりを把握することである。そのために、指導者は、児童生徒が思いや考えを見つめ直す場を確実に設定し、児童生徒の変容を記述や聞き取りの内容から評価し、一人ひとりにフィードバックを行うことが大切である。このように、本時の学習指導過程の中で学習活動のねらいに応じた評価とフィードバックを行うことの重要性を学んだ。

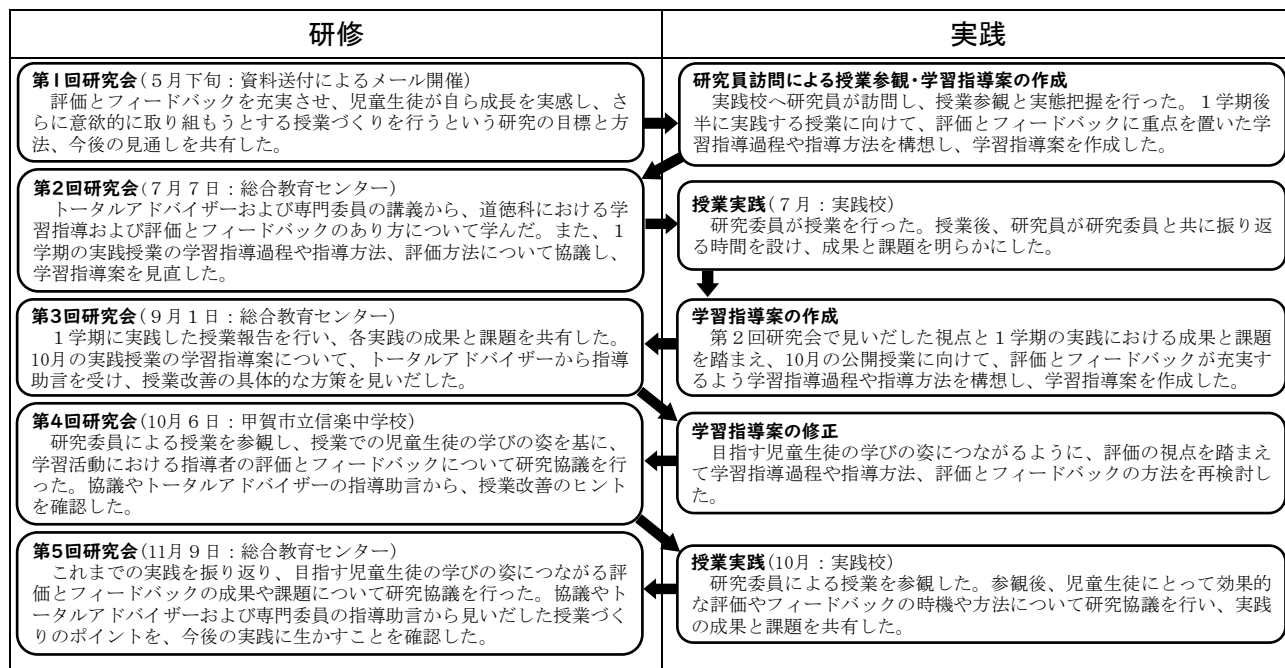


図3 本研究における研修と実践の往還

2 評価とフィードバックに重点を置いた授業実践

（1）授業の構想から実践までの実際

A中学校第2学年の内容項目「B 相互理解、寛容」（教材名「ジコチュウ」光村図書）の授業実践を例に、評価とフィードバックに重点を置いた授業の構想から実践までの実際を以下に述べる。

ア 目指す学びの姿の設定

授業を構想するにあたり、指導者は、まず、道徳科の年間指導計画と中学校解説道徳編から内容項目について確認した。「相互理解、寛容」について、「互いが相手の存在の独自性を認め、相手の考えや立場を尊重すること」が大切であり、「寛容の心をもてば、人を許し受け入れてとがめだてしないで、他者のよい面を積極的に認めようとする事ができる」という道徳的価値の意義を理解した。次に、その道徳的価値に対する生徒の実態を把握した。生徒は、これまでの学校生活において、自分の考えや意見を他者に伝えるとともに、その相手の考えや意見を聴くことで真の相互理解が可能になるということを学び、理解してきたが、自分の考えに固執し、他者の立場や考えに十分思いを巡らせることができずにすれ違いが生じるという課題があった。そして、教材を読み、登場人物の「僕」がクラスメイトの言動を自己中心的だと一方的に判断する場面があることに着目した。この自分の考えに固執してしまう「僕」について共感的に理解することを通して、自分と異なる他者の立場や考え方を尊重することの価値に気づき、これからの生き方を考えられるように、教材の登場人物への自我関与が中心となる学習を行うことにした。

そこで、本時で目指す生徒の学びの姿を「考えや立場の違いを尊重し合うことに価値があることに気づき、そのために相互理解に努め、他者に対して寛容の心をもって接しようとする姿」と具体的に設定し、本時のねらいに反映させることとした。

イ 学びの姿につながる指導

本時のねらいは、目指す学びの姿への実践意欲と態度を育てることとし、そのねらいを達成するために、3ページの図1に示した七つの評価の視点を用いて授業の展開を考えた(図4)。指導者は、本時の学習で目指す学びの姿の具体像をもつために、生徒の振り返りの記述内容を想定した(図5)。

自己中心的な人物のイメージとその関わりに関する事前アンケート(図6)では、生徒の半数以上が、自分が自己中心のだと感じる人物と「関わらない」「距離をとる」と、自分の体験や見聞きしたことから想起し、回答した。指導者はこのような生徒の実態を把握し、発問に対する反応を予想することに役立てた。このアンケートの結果は、本時の導入で生徒と共有した。

さらに、指導者は、第1発問では、評価の視点①「道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている」姿が、第2発問では、評価の視点④「読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている」姿が生徒の発言から表れることをねらい、意図的指名によって多くの考えを引き出した。生徒の発言に対して同意見もしくは反対意見の挙手を促すことで、全員が意思表示する機会を設け、特に、考え込んでいる様子や納得のいかない表情が見られた生徒に対する意図的指名を行い、多様な考えを比較できるようにした。「僕」が考えたことについて、ある生徒から「衝撃的だった」という趣旨の発言があった際、指導者は「衝撃とは具体的にはどういうことか」「何に対する衝撃か」と本人に問い返したり、「近い考えの人はいるか」「補足できることはあるか」と生徒と生徒の発言をつないだりすることで、学級全体が「僕」の思いを共感的に考えられるように働きかけた。

中心発問では、評価の視点⑥「道徳的な問題に対して、自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている」姿が表れることをねらい、本時の学習課題に関わり、「考えや立場の違いを尊重し合うためには、どんなことが大切なのか」について生徒が個人で考えて記述し、他者と考えを交流する活動を設けた。

内容項目:B 相互理解、寛容 教材名:「ジコチュウ」(「中学道徳2 きみがいちばんひかるとき」光村図書) 本時のねらい:クラスメイトの言動を自己中心的だと一方的に判断した「僕」について共感的に理解することを通して、考えや立場の違いを尊重し合うことに価値があることに気づき、そのために相互理解に努め、他者に対して寛容の心をもって接しようとする実践意欲と態度を育てる。		
	学習活動・主な発問	評価 ※()内は評価を行う対象
導入	1. 事前アンケートの結果を確かめ、主題に対して考える。	
展開	学習課題:どうすれば考えや立場の違いを尊重できるのだろうか	
	2. 教材「ジコチュウ」を読んで考える。 ○「僕」の課題は、どんなことだろうか。(第1発問)	評価の視点①(発言)
	○佐々木からの手紙を読んで、その場に凍りついたようになった「僕」はどんなことを考えたのだろうか。(第2発問)	評価の視点④(発言)
終末	3. 考えを深める。 ◎考えや立場の違いを尊重し合うためには、どんなことが大切なのだろうか。(中心発問)	評価の視点⑥(記述・発言)
	4. 本時の学習で学んだこと、気付いたことを振り返る。 ○この学習を通して、感じたことや考えたことはどんなことか。	評価の視点:道徳的価値や人間としての生き方についての考えの深まり(記述)

図4 本時のねらいと指導の流れ

- ・○○さんの考えを聞いて、人それぞれの個性を認め、相手の立場や状況を考えて、広い視野でものごとを見ることが大事だと思った。(多面的・多角的)
- ・今日の授業で、周囲の人たちと調和して生活していくためには、互いの考えや立場を理解し、尊重し合うことが必要だということが分かった。(道徳的価値の理解)
- ・考えが合わない人に対して、理解しようとしていない自分がある。寛容の心をもって人と接することは難しいことだが、自分の所属する集団や、自分自身の成長のために必要なことなので、そうできるように心がけていきたい。(自分自身との関わり・人間としての生き方)

図5 指導者が想定した振り返りの記述例

Q.「ジコチュウ」な人とは、どんな人のことだと思いますか？

- ・自分が世界の中心だと思っている人
- ・自分の思い通りにならないと嫌な人
- ・自分に都合のよいことばかりをする人
- ・人のことより先に自分のことを考える人
- ・相手のことを考えたり、譲ったりしない人
- ・責任感がない人
- ・本人に自覚はなくても、周りに不快な思いをさせてしまう人

Q.「ジコチュウ」な人がいたら、どうしますか？

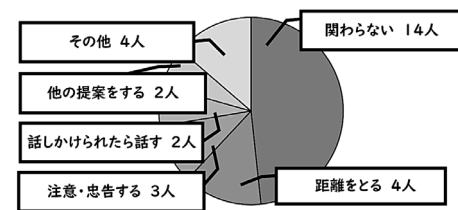


図6 提示した事前アンケートの結果

本時の終末では、道徳的価値の理解の深まりから、「自己を振り返り、人間としての生き方について考えられる」姿が表れることをねらい、生徒が学習を振り返って記述する活動を設けた。

このように、指導者は、本時で目指す生徒の学びの姿につながるよう、評価の視点を踏まえて授業を構想し、その視点に沿った学習活動の中で生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子の適切な把握を図った。

ウ 学びの姿を適切に把握する評価

指導者は、本時における評価をノートでの記述と生徒の様子の分析および観察によって行った。ノートの記述は、1単位時間の全員の学習の記録として集めることができ、考えの変容や深まりを、授業中および授業後にも把握することが可能であるという特長から、終末での評価に用いた。しかし、記述する活動は時間を要するという点を考慮し、中心発問と振り返りの場面に限った。展開や終末を通して生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を評価するために、授業中の表情やしぐさ、態度、発言等を観察することにした。そして、生徒のよさを捉えた場合には、評価の視点に沿って、その場で指導者用ノートに記録を残し、特に、記述することや発言することを苦手とする生徒を注意深く観察することにした。

授業では、第2発問の段階で、複数の生徒が「僕」の言動を批判的に捉えることに終始し、共感的理解に至っていなかったことから、指導者は、評価の視点④の登場人物を自分と置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージすることが不十分であると評価した。そこで、中心発問の前に、生徒が教材の世界を基に、自分自身との関わりの中で考えられるように、事前アンケートの結果を再度示し、学級や部活動、委員会活動等の生徒にとって身近な場면을具体的に例示した。次に、指導者が「自分と考えや立場が異なる人と接することなく生活できるだろうか」と問いかけると、即座に首を振る生徒の姿も見られた。その後、生徒は、一人ひとりが具体的な生活場面のイメージをもって、自分事として中心発問を考え、記述をしていた。生徒同士が互いの記述内容を読み合う活動(図7)では、自分の考えがまとまらずに困っていた生徒が、他者の記述内容を参考にして書き出したり、既に記述していた生徒が、新たな気付きを得て追記したりする姿が見られた。全体で意見を交流する際にも、自分の考えだけではなく、印象に残った他者の考えも交えて発言していた。指導者は、これらの生徒の記述や発言から、評価の視点⑥の自分の考えと他者の考えを比較することを通して、道徳的価値の理解を深めている姿を評価し、フィードバックに生かした。



図7 他の生徒の記述内容を読み、考えを交流する様子

エ 生徒への積極的なフィードバック

本授業では、指導者は把握した学習状況や道徳性に係る成長の様子に対する言葉かけと生徒の中心発問と振り返りの記述への書き込みによるフィードバックに取り組んだ。生徒が教材の登場人物に対して共感的に理解したり、他者の考えを受け止めたりする反応が見られた場面では、「なるほど!」「そういう考え方もできるんだね」「今の話を聞いて、うなずいている人もいるね」「〇〇さんもそう書いていたね」等、一人ひとりの考えを受容し、積極的に認める言葉を用いたフィードバックを行った(図8)。このような指導者のフィードバックを受け、特に、中心発問について学級全体で考えを交流する場



図8 生徒の言葉に耳を傾ける指導者

面では、これまでとは違う視点から自分の考えを發表したり、ノートにさらに詳しく考えを書き足したりする生徒の姿が見られた。

本時の終末における振り返りの記述の評価は、本時の学習で設定しておいた目指す学びの姿と認められる振り返りの記述(p.7の図5)の内容と評価の視点「道徳的価値や人間としての生き方についての考えを深めているか」を基に行った。多面的・多角的に考えている

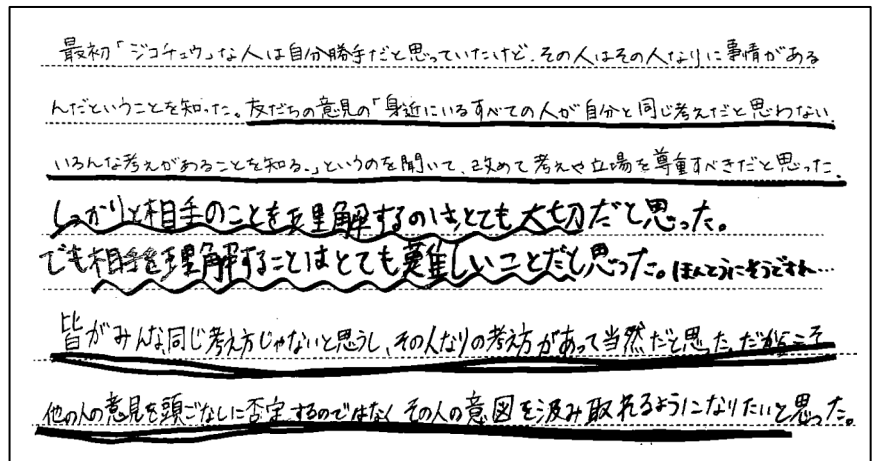


図9 生徒(3名)の振り返りの記述と指導者による下線とコメント

記述に一本線、自分自身との関わりの中で考えている記述に波線、自己を振り返り、人間としての生き方について考えている記述には二重線、と線種を引き分けることでフィードバックを行った(図9)。毎時間の学習後に、生徒の記述に対する評価とコメントの記入を継続的に行ったことで、当初は本時の振り返りを一文程度で書くだけだった生徒の記述量が増加し、学習活動を通して他者の意見を参考にしながら、道徳的価値や人間としての生き方について考えを深めた様子が見えてきた。

オ 評価とフィードバックの充実から見た生徒の姿

図10の質問紙調査の結果は、評価とフィードバックに重点を置いた授業を継続して実践してきた本学級の生徒を対象にしたものである。設問「道徳の授業での言動(発言や記述等)に対して、先生がよい点を認め、励ましてくれることで、自分のよさが分かり、さらによくしていこうと思う」「道徳の授業を通して、自分の成長を感じることがある」では、いずれも肯定的な回答をした生徒が増加した。本学級で特に注目することとしていた生徒aは、6月の質問紙調査では、いずれの設問に対して

も、「どちらかといえば当てはまる」と回答していたが、11月には「当てはまる」と回答した。この生徒は、当初、自分の考えを言語化することへの苦手意識から、記述することを敬遠する傾向があり、学習に対して消極的な姿勢が見られた。しかし、指導者が授業の中で個別に言葉がけを行い、記述に対する評価とコメントの記入を重ねるうちに、一つひとつの発問について、じっくりと考えて記述するようになった(図11)。印象に残った友達の考えやキーワードを自発的にノートに書き加えることもあり、指導者に対して「今日の授業では、たくさん考えたから、こんなに書くこ

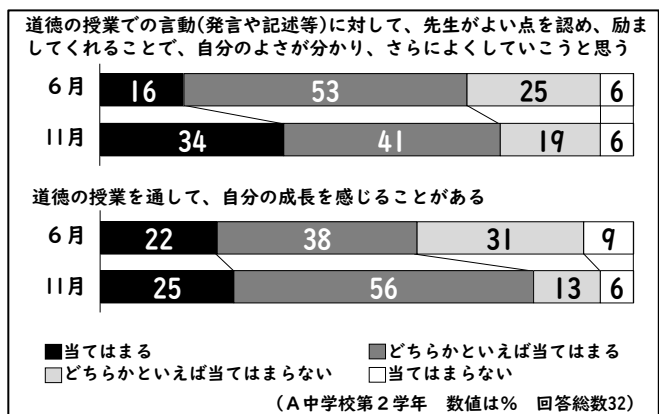


図10 生徒対象質問紙調査の結果

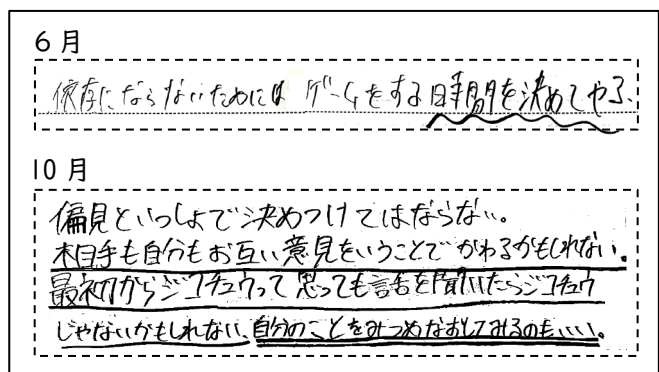


図11 生徒aの振り返りの記述の比較

とができた」と伝える場面もあった。このような生徒の変容は、指導者が、授業における生徒一人ひとりの学習状況や道徳性に係る成長の様子を個に応じて把握し、フィードバックを継続的に行ったことによると考えられる。

(2) 評価とフィードバックのさらなる充実

ア 児童生徒の考え方を積極的に認めるフィードバック

B小学校第4学年の内容項目「B 友情、信頼」(教材名「絵はがきと切手」日本文教出版)の実践では、教材の登場人物「ひろ子」の心情を考え、よりよい友達関係を築いていくうえで、友達のことを信頼し、助け合うことの大切さを理解することを通して、友達との信頼感や友情を深めていこうとする姿を目指した。

本時の展開では、友達の「正子」から料金不足の絵はがきが届き、そのことを「正子」に手紙で教えるかどうか悩んでいる「ひろ子」の心情を考えた。この活動では、評価の視点①を基に、「判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている」姿を見取ることとした。指導者は、料金不足を「教える」と「教えない」という対立する考えを黒板の左右に配置し、児童が自分の考えに近い位置にネームカードを貼る活動を取り入れた(図12)。児童は、他者の考えと比較しながら、自分の考えを深めていった。児童からは、「料金不足を教えたら、もう手紙を送ってくれないかもしれない」や「教えるとしても、小さな字で優しく書かないと正子さんが怒るかもしれない」と、料金不足を「正子」に教えることに消極的な意見が出た。その中で、児童bは、「料金不足を教えると、自分も正子さんもぼかぼかした気持ちになると思う」「今まで仲よくしてきたから、正子さんなら『教えてくれてありがとう』と言ってくれる」と発言した。指導者は、料金不足を教えたことを「正子」が前向きに受け止めるという、他の意見とは異なる考え方をしている児童bの学習状況を捉え、「『正子』は、逆に感謝すると思うんだね」と認める言葉を用いてフィードバックを行った。本時の終末で、児童bは、「今日の学習で、友達の立場に立って、どんな気持ちになるかを考えることができる人になりたい」と振り返り、本時の学習をこれからの自分の生活に生かしたいと意欲を高める姿が見られた。

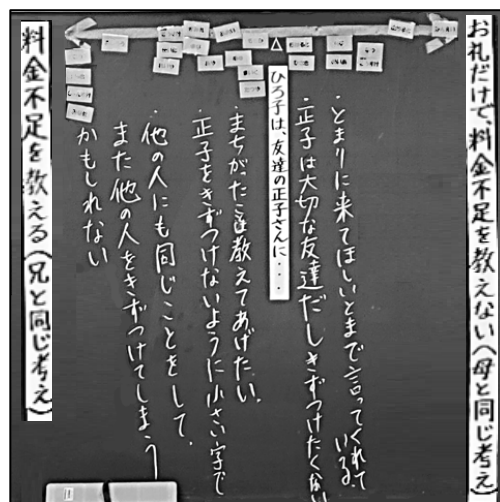


図12 考えを比較するための板書

また、指導者は、登場人物に自分を置き換えて考え、自分の行動を見直すことができている児童cの学習状況を捉えた。それは、児童cが、当初、「料金不足を注意できる」と発言していたが、友達の考えを聞く中で、「やっぱり自分なら友達に注意できないかもしれない」と発言したからである。この発言に対して、指導者は、「友達の間違いを注意できると言っていたけれども、注意できないという気持ちも自分の中にあるということだね」と認める言葉を用いてフィードバックを行った。本時の終末で、児童cは、「人は完璧ではないから、自分の間違いを相手が正し、相手の間違いを自分が正すような組合せが本当の友達だと思う。自分もそんな友達を多くつくっていききたい」と振り返り、本時の道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めることができた。

イ 学びの姿を引き出す評価の視点を基にした意図的指名

C小学校第6学年の内容項目「B 相互理解、寛容」(教材名「ブランコ乗りとピエロ」日本文教出版)の実践では、サーカスのブランコ乗り「サム」の自分勝手な行動を受け止める「ピエロ」

の心情を考えることを通して、相手の考え方を謙虚に受け止め理解し合うことが、よりよい人間関係を築くことにつながることに気付き、自分と相手との見方や考え方に相違があっても、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重しようとする姿を目指した。

本時では、中心発問「ピエロはどんな思いでサムを許したのか」について、ペアで話し合ったり、ワークシートに記述したことを児童が互いに読み合ったりして考える活動に取り組んだ。指導者は、評価の視点①の「判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている」姿を児童の発言や記述から見取り、座席表に記録した。その記録を基に、全体交流で意図的指名を行った(図13)。ピエロに共感した児童と共感できない児童を指導者が意図的に指名し、それぞれの立場の考えが明らかになるように問い返したところ、それぞれの立場から議論を交わしたり、友達の考えに納得したりする姿が見られた。また、「〇〇さんは違った視点で考えて書いていましたね」と、それまでに出了意見とは異なる考え方をしていることを学級全体に知らせることでフィードバックを行った。

本時の終末では、学習を振り返る場面で、全体交流で発言しなかった児童が、「〇〇さんの意見に共感した」「反対の立場になって考えることもよいと思った」とワークシートに記述した。指導者が、評価の視点を基に児童の学習状況を把握し、意図的指名により多様な考え方を引き出して話合いを促したことで、児童が多面的・多角的に考えようとする姿につながった。

児童d：ピエロも団員たちも頑張っているのに、サムだけが頑張っているというのはおかしいと思います。
 指導者：dさんがこう言っていますが、eさん、どうですか。
 児童e：サムも一生懸命に頑張ったんだから許してあげてほしいです。
 児童d：確かにサムも頑張っているけど、サムの自分勝手のせいで、ピエロは大王様に演技を見てもらえなかったから、サムを許せません。
 児童f：でも、サムは汗だくで顔が真っ青だったということだから、命を懸けて演技をしていたということだと思います。
 児童d：ああ、なるほど。
 児童g：サムの演技の後の疲れ切った姿にピエロが心を打たれたんだと思います。
 指導者：hさんは違った視点で考えて書いていましたね。
 児童h：サムの目立ちたいという気持ちに共感したから許したんだと思います。
 指導者：[全員に向かって]「共感」と言ったけど、何に共感するのでしょうか。
 iさん、書いていたことを教えてください。
 児童i：お客さんを笑顔にしたいという気持ちです。



図13 交流場面での指導者と児童のやり取り([]内は筆者)

ウ 個に応じた評価とフィードバック

D小学校第4学年の内容項目「B 親切、思いやり」(教材名「心と心のあくしゅ」日本文教出版)の実践では、坂道を上る「おばあさん」の姿を見守る「はやと」の心情について考え、相手にとっての親切を考えることが大切であるという道徳的価値の理解を深める姿を目指した。

本時では、展開において、評価の視点⑥を基に、「道徳的な問題に対して、自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている」姿を、ワークシートへの記述や話し合う活動での発言から評価することとした。

本時の授業では、自分の考えを伝え合い、自分ならどのように行動するとよいのかを考えている児童の姿が多く見られた。しかし、児童jは、相手にとっての親切について、「見守る」という一語のみの表現にとどまっており、指導者は学習状況を十分に把握することができなかった。そこで、児童jに対して個別に聞き取りを行うことで学習状況を把握し、本時の道徳的価値や自己の生き方についての考えの深まりを捉えたいと考えた。後日、児童が下学年の児童と交流する活動に臨む時機を生かし、指導者は、相手にとっての親切について問いかけ、本時で表現できなかった思いを聞き出した。児童jは、「まず、声をかけ、本当に困っているか聞いてみる」「自

分のしたことが相手のためにならなかつたら親切ではない」「相手に断られても、困っている人を見つけたら、声をかけたい」等と答えた。指導者が、個に応じた方法で学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握し、評価とフィードバックを行ったことで、児童の学びを確かめることができた。また、児童は、「親切」についての理解を深め、自分のこれからの生活に生かそうとする意欲をもっていることが分かった。

エ 通信への掲載による事後指導におけるフィードバック

A中学校では、授業後のフィードバックとして、学級通信を活用した。学級通信には、生徒が授業の終末で記述した振り返りの中から、道徳的価値の理解を深め、目指す学びの姿に近付いた考えや意見と、指導者が授業において把握した学びの姿やその変容について掲載した(図14)。発行後、生徒は学級通信を基に、改めて友達と授業の内容について話すことが増えた。

さらに、授業の中でも学級通信を活用した。本時の導入で、扱う内容項目に関連する発行済みの学級通信を用いて復習することにより、既習の内容とつなげて考え、本時のねらいに迫る生徒の様子が見られた。このような事後指導の工夫により、学級通信に記述が掲載された生徒に対するフィードバックにとどまらず、既習の学びを新たな学びに生かす学習が実現できた。

KTG34

2-9通信
2020/11発行

苦しいときも楽しいときもたくさん仲間とともにGreatなクラスを目指す34人

以前の道徳では、『ジコチュウ』という話をもとに、みんなで考えていきました。最初にアンケートを取ったときは、「ジコチュウな人とは関わらない」と答えた人が大半でしたが、色々な意見を出していく中で、考えが深まった人がたくさんいました。一部を紹介します。

●今回の話では、登場人物の「佐々木」よりも「僕」のほうがジコチュウだと思った。人の考えを理解しようとせずに自分の意見を押し通そうとする姿が自己中心的な行動だったから。社会に出て(そういう人)絶対に関わらないというのは無理だと思うし、少し相手のことを考えてみるというかも。

○最初からこの人はジコチュウだ、嫌な人、という決めつけをせずに、その人のことを知ろうとする気持ちが大切だと思いました。関わらないよりも一度話してみよう、良いところが見つかるのではないかと思います。

●相手も自分もお互い意見を言うことで変わるかもしれない。最初からジコチュウって思っても話を聞いたらジコチュウじゃないかもしれない。自分のことを見つめて直してみるのもいい。

○皆がみんな同じ考え方じゃないと思うし、その人なりの考え方があって当然だと思った。だからその他の人の意見を頭ごなしに否定するのではなく、その人の意図を読み取れるようになりたいと思った。

●自分と相手は違うから自分の考えが正解というわけではない。

●自分のことだけ分かってもらおうとせずに、相手のことも分かろうとすることが、考えや立場の違いを尊重し合うときに大切なことだと思いました。

○身の回りに嫌な人(意見が合わないと思う人)がいなくても、最初から「あいつは○○だ!」と決めつけるのではなく、どうしたらうまく関わることができるのかをしっかりと考えていきたいと思った。
(また、そういう人になりたい。)

「考えや立場の違いを尊重するためにはどうすればいいの?」

☆寛容になり、広い心で受け止める。 ☆先入観を捨てる。 ☆考え方は十人十色だということを理解する。
☆身近にいる全ての人が自分と同じ考えだと思わない。色々な考えの人がいるということを理解する。

アンケートを取った際、「ジコチュウじゃない人なんていないの?」と尋ねてきた人がいました。授業を通して、自分を優先させるばかりでは成長につながらないと気づき、そのことを振り返りに記述していました。「相手を理解することはとても難しいことだと思った。」と書いた人もいました。

自分の意見をしっかりと伝え、相手の意見もしっかり聴く姿勢をもつことは容易ではありません。しかし、そうすることが、自分自身の成長につながっていくのだと思います。これから先、色々な人との出会いがあるはずのみなさん。ぜひ、このことを心に留めておいてください。

※小我：自己中心的な狭い範囲に閉じこもった自我のこと

他人の位置に
ときどき自分を置き、
自分の位置に
他人を置き
他人の気持ちを察し、
小我をのさばらせない。
武者小路実篤

他人の位置に
ときどき自分を置き、
自分の位置に
他人を置き
他人の気持ちを察し、
小我をのさばらせない。
武者小路実篤

図 14 授業後の学級通信(一部)

3 児童生徒と研究委員の変容

(1) 児童生徒の変容

図15は、研究委員が指導者として、道徳科の授業を行った児童生徒を対象に実施した質問紙調査の結果を事前(6月)と事後(11月)で比較したものである。道徳科の評価とフィードバックに関する設問では、肯定的な回答をした児童生徒の割合がどちらも増加した。自分の成長を感じる理由として、「友達の考えによって、新しい自分の考えが生まれたから」「授業の中で、自分も同じようなことがあると振り返り、これ

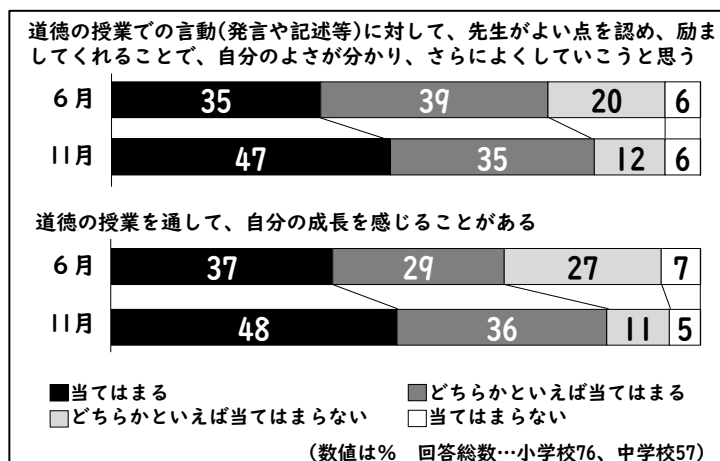


図 15 児童生徒対象質問紙調査の結果

からはこうしていこうと考えて行動することがあるから」という記述が見られ、校種に関わらず、指導者が、評価の視点を踏まえた指導を行ったことで、多面的・多角的に考えたり、自分自身との関わりの中で考えたりすることができるようになったことを実感している様子がうかがえた。また、「先生から自分の考えが変わってきたことを教えてもらったから」と記述した児童生徒もあり、指導者が、児童生徒一人ひとりの振り返りの記述や発言から、道徳性に係る成長の様子を捉えてフィードバックを行ったことで、自己の変容の実感につながったものと考えられる。

図16は、「道徳の授業の中で楽しいと思ったり、もっと学びたいと思ったりするのはどんなときですか」という設問に対する児童生徒の記述内容を事前と事後で比較したものである。事前では、話し合う活動自体が楽しいという記述が多く見られたが、事後では、話し合う活動を通して、これまでの自分のものの見方や考え方が広がったり深まったりしたことから、意欲の高まりが感じられる記述が見られた。指導者が、評価の視点を基に授業を構想したことにより、児童生徒は、何をどのように考えようといのかを理解して、意欲的に学習活動に取り組むことができた。

道徳の授業の中で楽しいと思ったり、もっと学びたいと思ったりするのはどんなときですか(自由記述)	
6月	・友達の意見を聞くことが楽しい ・自分の考えが相手に伝わったとき ・グループで話し合っているとき
11月	・自分の考え方と比べながら友達の考えを聞くとき ・友達の意見を聞いて、自分の考えが変わるとき ・自分と異なる立場や感じ方、ものごとを様々な視点から考えられるので、もっと学びたい

図16 児童生徒対象質問紙調査における自由記述の変容

(2) 指導者の変容

指導者を対象に質問紙調査を実施し、事前と事後の記述を比較した(図17)。本研究の授業づくりから感じた効果について、指導者(小学校)は評価の視点を踏まえて、多面的・多角的に考えたり、自分との関わりの中で考えたりすることができる学習活動を設定したことにより、児童の学びの姿に変化が見られたことを実感している。また、指導者(中学校)は、授業において生徒一人ひとりの学習状況や道徳性に係る成長の

道徳科の授業づくりで効果を感じるのはどんなときですか		
	指導者(小学校)	指導者(中学校)
6月	児童が自分の思いをペアやグループで積極的に話しているとき。	日頃、効果を感じることは少ない。年度末に生徒と1年間の道徳科の授業を振り返ったとき、印象に残っている授業が各々あり、内容やその時の自分の考えを覚えていたことに驚いた。毎時間、生徒にとって学びの深まる授業づくりに取り組む必要がある。
11月	児童一人ひとりが意思表示を行い、考えを交流する活動を設けることで、振り返りに新たな気付きを書く児童が増え、これまでの自分とこれからの自分について考えているのが分かったとき。	個別の言葉がけを行ったことで、筆の進まない生徒が考えを徐々にまとめ、書き始めることができたときや、こちらの意図的指名による発言を基にして、他の生徒が発言したり、記述したりするとき。

図17 指導者対象質問紙調査における自由記述の変容

様子を把握し、個別の言葉がけや意図的指名を行うことで、生徒が自分の考えを表出できるようになったことを実感していることが分かる。いずれも、指導者が本研究の取組を進める中で、評価の視点を踏まえて授業を構想し、評価とフィードバックを充実させたことによる効果を実感することにつながったと考えられる。

さらに、第5回研究会終了後の振り返りの記述や聞き取りからは、指導者の所感が以下のとおり得られた(p. 14の図18)。評価とフィードバックを毎時間積み重ねることによる児童生徒の学びの姿の変容から、今後の授業においても本研究での取組を継続していこうとする姿勢をうかがうことができた。

- ・指導者が指導の意図を明確にもち、評価の視点を踏まえて授業づくりを行う重要性を実感した。児童が何をどのように考えて、道徳的価値の理解を深められるようにするのか、毎時間しっかりと考えたい。
- ・児童の道徳的価値の理解を深めるために、終末で本時を振り返る時間を十分に確保し、本時のねらいに沿った振り返りを行う必要があると感じている。
- ・指導者が、生徒一人ひとりの考えを受け止め、積極的に認める言葉を使ってフィードバックを行ったことにより、生徒は、自分の考えを素直に表現することができ、その考えを傾聴することができる学級の雰囲気が生まれた。また、生徒が自信をもって発言や記述に臨めるようになった。
- ・考えを交流する活動を重ねるごとに、自分の考えを友達に伝えたいという気持ちが高まり、記述内容が詳細なものに変化してきた生徒もいる。この先も、そのような生徒一人ひとりの学びの姿をしっかりと把握してフィードバックしたい。

図 18 指導者の所感(自由記述および聞き取り)

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 指導者が指導の意図を明確にもち、評価の視点を踏まえて、評価とフィードバックに重点を置いた授業を実践することで、児童生徒の目指す学びの姿につながる学習指導過程や指導方法を改善することができた。
- (2) 児童生徒の学習状況と道徳性に係る成長の様子を把握し評価したことをフィードバックする効果的な場面と方法、さらに留意点を見いだすことができた。
- (3) 指導者による学習活動に着目した評価とフィードバックを通して、児童生徒が、自らの成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとする姿が見られた。

2 今後の課題

- (1) 児童生徒が道徳的価値やこれからの生き方についての考えを深め、自らの成長をさらに実感するためには、指導者による評価とフィードバックがより個に応じたものになるよう、改善と充実を図る必要がある。
- (2) 指導と評価を一体化し、児童生徒の道徳性をさらに養うためには、指導者が授業に対する評価の観点を基に自らの指導を振り返り、授業改善に生かす方法を検討する必要がある。

文

献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」、平成30年(2018年)
 - 2) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」、平成30年(2018年)
 - 3) 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」、令和元年(2019年)
 - 4) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)」、平成30年(2018年)
 - 5) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)」、平成30年(2018年)
- 柴原弘志・荊木聡『中学校 新学習指導要領 道徳の授業づくり』、明治図書出版、平成30年(2018年)
- 浅見哲也『こだわりの道徳授業レシピ～あなたはどんな授業がお好みですか?～』、東洋館出版社、令和2年(2020年)
- 赤堀博行『事例でよくわかる中学校「道徳科」評価と通知表記入』、教育開発研究所、令和2年(2020年)

トータルアドバイザー

京都産業大学現代社会学部教授

柴原 弘志

専門委員

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事

川村 友子

研究委員

高島市立高島小学校教諭

湊田 弘人

大津市立打出中学校教諭

片木絵理佳

湖南市立菩提寺小学校教諭

新宅 響子

甲賀市立信楽中学校教諭

堀内 久生

草津市立南笠東小学校教諭

奥野 光久

彦根市立東中学校教諭

押谷 英治